

# 1 「社会福祉」のなかにある「希望」

湧井 規子 (社会福祉法人名古屋キリスト教社会館 理事長)



## 心から共感できるつながり……………◆

一月、当法人の障害者事業所で「成人を祝うつどい」をおこないました(コロナ禍なので規模を小さくして実施)。言葉による会話ができない二人のなかまですが、二〇年間の映像のあと、「成人の言葉」が書道で披露されました。「笑顔いっぱい」「人とつながり一緒に歩みつづけたい」と書かれています。これは、二人の気持ちをくみとって、職員が一緒に書いたものでした。

終わりのあいさつのとき、父親が正直に話してくださいました。「私は海外出張もあり、子育てを母親に任せっきりでした。最近になって、この子とコミュニケーションが取れることを感じ、成長している姿に感動しました。これは、妻をはじめ、幼児期からずっとかかわり支えてくださったみなさまのおかげです。こ

れからは、心を新たに家族とともに、私も父親として成長していきたい。

障害という事実直面した苦難を乗り越え、この子とともに生きてしあわせだったと言えるまでの道りは長い。社会福祉現場で働く私たちもまた、家族を適切に理解しサポートできるには、直接人と対面しての経験と学習を積む時間が必要です。「あとき、苦労だったね。よく乗り越えたね」「あときのごときは一生忘れない」と、心から共感できるつながりをもつことが出来るのは、社会福祉労働の大きな魅力です。

## 私が「社会福祉」につなげたルーツ……………◆

幼なじみの明生ちゃんが、小学生のときに日本脳炎

に罹患し、会話も歩行もまったくできなくなりました。私には衝撃でした。大きくなると、抗てんかん薬でくちびるが肥大し、怖さを感じるほどに顔つきが変わりました。母親と彼の家に訪問すると、ご両親に「規ちゃん、明生と遊んでね」といつも言われました。わが家にもよく遊びにきました。なにをして遊んだかは覚えていませんが、明生ちゃんと、お母さんお父さんの明るい笑顔だけは、くつきりと思い浮かびます。今考えると、息子が人とつながるチャンスを閉ざさなかつたご両親は立派だと、つくづく思います。

私は看護師をめざし京都で学んだあと、「愛知県心身障害者コロニー」に就職し、児童精神科で働きました。創設期だったので、充実感のなかで障害児看護を学びました。やがて山のなかに隔離されているようなあり方に疑問をもち、転職を考えました。

保育園での障害児保育が注目されはじめたところで、名古屋キリスト教社会館(以下、社会館)は、「共に育ちあう統合保育」を実践している先進的な園だという評判を知りました。折しも、「社会館」が産休明け保育事業をはじめるにあたり、看護師を募集するというチャンスに遭遇し、晴れて採用。私は、乳児保育・障

害児保育と保育園保健にとりくむこととなりました。

## 人とよろこびあえる福祉実践……………◆

保育士資格はありませんが、田中昌人先生の「発達理論」を保育者たちと学んだことが今も力になっていると思います。「発達の主人公は子どもである」「矛盾は発達の原動力である」という言葉を、何度も何度もかみしめました。

法人運営に混乱が生じて、独身だったがゆえに七年度で園長職を依頼されたときは、押し寄せる不安に泣きました。まったく未熟なままのスタートでしたが、「みんなで創り出していこう」という職員集団の力強い支えがありました。理事会や職員と共に合意形成を大事にして仕事をつくりだす努力は、今もつづいています。苦労と失敗を経験しながら、「矛盾は発達の原動力」という見方に励まされ、人とよろこびあえる福祉・保育実践によって育てられてきた私。

今、私たちは「コロナ禍」という「矛盾」のなかで立たされながらも、「社会福祉」を毎日実践しています。私たちは、コロナ禍で「希望」を創り出していると思っています。